



『幼児の教育』と私

榊田 正子

いつもいつも身近にあつて当たり前のように感じていた『幼児の教育』が、百巻を迎えたということ、その地道な百年間の継続の重さに感嘆すると同時に、それぞれの時期に、強い思いと大変な努力をもつて編集・刊行の作業を続けてこられた方々に感謝の念を抑えることができません。

*

母が幼稚園の教師をしていて長年の読者であつたので、表紙の絵と『幼児の教育』の誌名は、十代の頃から私にとって見覚えがあり親しみを感じるものでした。学生時代には、

当時附属幼稚園の中にあつた津守先生の研究室で、編

集の代表でいらした津守先生や実務を担当しておられ

た木原（赤池）さん、井上（寺井）さんのご様子を目

にしていまして、誌面には、実習や観察をさせてい

ただいている附属幼稚園の保育の実際や研究会の記事

なども載っていましたから、私自身としては何のお手伝いをしたわけでもなかったのです

が、非常に身近な雑誌として思い入れも強くなってきました。また内容的には、附属幼

稚園の保育とは切り離すことのできない強い絆を持つものであり、その時々の方が国の幼

児教育の様子を感じ取ることのできる雑誌という思いがありましたので、仕事を離れて家

庭で子育てに専念していた数年間も、『幼児の教育』の読者であることによって、子ども

と共にある者としての立場を考へることができたように思っています。

*

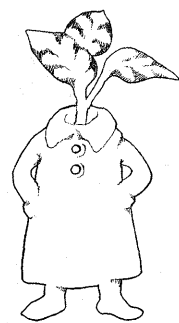
附属幼稚園の園長室の書棚には、創刊号の『婦人と子ども』から最新号の『幼児の教

育』までがほぼ一年分ずつ製本されて並んでいます。いま書棚の前に立って、これらが附

属幼稚園の、また日本の幼稚園の百年間と重なるものなのだと思うと、一瞬言葉では表現

できないような感慨を覚えます。その重みを味わいながら改めて一冊ずつ読んでいくこと

が出来たら——それはものすごく興味のあることではありますが、現実に今の慌ただしい





日常の中では望むべくも無いこととも思っています。

しかし附属幼稚園には、時々各方面から古い時代の幼稚園や幼児の生活等について様々な問い合わせが来ます。そのお返事をする際に、殆どの場合私は、参考資料の一部として関連すると思われる時代の『幼児の教育』を書棚から取り出し出して開いて見るのです。問い合わせの事柄の背景に、当時の幼稚園ではどんなことが大切にされてどんな保育が行われていたのかを垣間見ることによって、関連して色々なことが理解されたり気付けたりするからです。全く別々の事柄として捉えていたことがつながりをもつて見えてきたり、自分の中で金科玉条のように重視していたことのルーツを見つけるとそんなにこだわる必要の無いことがわかって思いがけない解放感を味わったり、時には異分野の著名人と思っていた方が幼児教育に深い関心を持っておられることをその記事から発見したり——全くプライベートながらこれまで読んだことも無かった母の投稿を見つけたり——、思わず時間を忘れて読みふけてしまうことも少なくはなく、現在附属幼稚園に在職するものとして『幼児の教育』の多大な恩恵に浴しているのです。

冒頭に書いたように、私にとって『幼児の教育』は、これまでも今も、いつも身近にあって、とても大切なものでした。これからも、そんなかわりを持ち続けていかれたらと願っています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)